

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 既習事項や他者の考え、これからの自分の人生と現在の自分の考えをつなぐことで、考えの拡充・深化を図る必要がある。
- 「か・す・や」の振り返りを通して、自己の変容に気づく場面の充実を図る必要がある。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～3つの「つなぐ」を重視した、自己の変容(=学びの価値)を実感させる授業づくり～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶「ひが中ナビ」を用いた授業展開の共有

◇ 本校の共通実践事項をまとめた「ひが中ナビ」を用いて、学習指導過程に応じた3つの「つなぐ(これまでの自分とつなぐ、他の人とつなぐ、これからの自分とつなぐ)」を重視した授業展開を提案した。その後、提案内容を意識した代表授業研修を行い、全職員で授業づくりの方向性を共有した。代表授業研修においては、教科部会を活用した授業改善サイクルによる学習指導の充実を図った。

学習指導過程	学ぶ意義・生徒の思考	トーク活動 ICT
これまでの自分とつなぐ。	導入。 めあて。 見通し。 自分の現状は(何を学習してきたのか)。 (何ができるのか、何を知っているのか)。 自分の課題は(何を、どうすべきなのか)。	セルフ。 ペア。
他の人とつなぐ。	展開。 多様な、新たな見方・考え方。 共同することの意義・効果。	ペア。 グループ。 全体。
これからの自分とつなぐ。	まとめ。 振り返り。 めあてに対する学習活動(内容)の終結・ゴール。 新たな疑問・問い・気づき。 次時以降への意欲(つなげたい・いかしたい・もう一度やりたい)。 活用・応用への意欲(実生活で、他の教科で)。	セルフ。 学びの価値

【「つなぐ」学習のモデル】

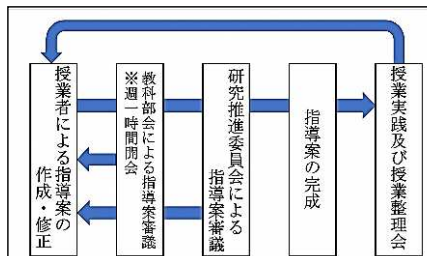
◀取組2▶「か・す・や」の振り返り内容の修正と実践

◇ 授業の終末段階に位置付けている「か・す・や(かくとくした事、すばらしい友達の意見、やってみようこと)」の振り返りの活動における視点を見直し、学習前後の自己の変容をより実感できるように修正した。また、代表授業研修や職員研修等を通して共通理解と実践を図った。さらに、よい振り返りの内容については、学級に掲示するなどして、生徒と振り返りのゴール像を共有した。

(取組1、2の成果)

- 「ひが中ナビ」の提案やモデル授業の実践を通して、3つの「つなぐ」を意識した授業づくりのイメージを共有することができた。それにより、教科部会において各教科の効果的な手立てや工夫を共有したり、よりよい手立てについて練り合ったりすることができた。
- 振り返りの内容を修正することで、授業充実度調査における振り返りの結果に向上が見られた(4件法において「R2前期:3.0」→「R3前期:3.3」)。生徒の記述内容についても充実が見られ、生徒に「学ぶ価値」を実感させやすくなった。

【教科部会を活用した授業実践サイクル】



■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 既習事項とのズレや、生徒が興味・関心を示すような資料の提示をするなど、生徒の学習意欲を喚起する導入の工夫が必要である。
- C層、D層の生徒に対する授業での主体的な学びを促す支援の在り方を明らかにする必要がある。
- ◇ 生徒の「わからない」「困った」を事前に想定するなど、多様な支援を具体化する。
- ◇ C層、D層への支援を位置付けた授業の導入段階の工夫を行う。

組織づくり

■ これまでの取組における課題

- 授業づくりのための校内研修システムを構築する必要がある。
- 取組の共有と見直し、短いスパンで評価、改善を行う必要がある。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～全職員が自己の役割を明確に自覚して行う組織的な取組～

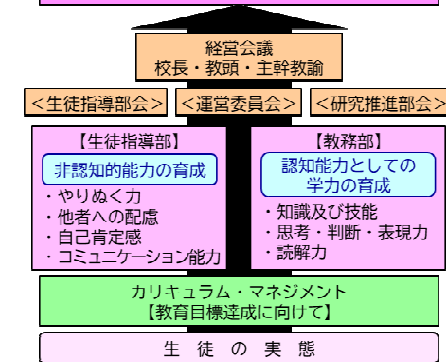
取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶ 研究推進体制の構築

◇ 校務分掌の役割を見直し、「非認知的能力の育成」を生徒指導部、「認知能力としての学力の育成」を教務部が担当し、全職員で学力向上に取り組んだ。また、小中9年間をつないだ取組を整理し、発達段階に応じた指導の充実を図った。

◇ 学力向上ロードマップを活用した校内研修を、PDCAサイクルの各段階に位置付け、各分掌の取組の充実を図った。

社会(他の人)の中で自分らしき・能力・可能性等を最大限に実現する【自己実現】



【研究組織図】

(取組1の成果)

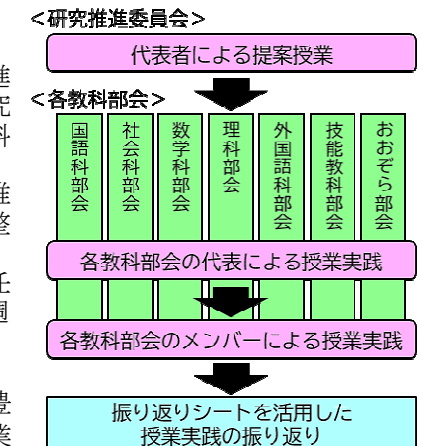
- 校務分掌を意識した取組を実践したため、教員の組織マネジメントへの参画意識が高揚した。

◀取組2▶ 教科部会の充実

◇ 教科部会を中心とした授業改善を推進していくために、研究内容の提案を「研究推進委員会」→「教科主任者会」→「教科部会」の流れで行った。

◇ 各教科部会で指導案検討後、研究推進委員会で指導案審議を行う体制を整えた。

◇ 研究推進委員会(週1回)、教科主任者会(月1回)、教科部会(週1回)を週時程に位置付けた。



(取組2の成果)

- 若年教員にとって教科部会が、経験豊富な教員から指導・助言を受けたり、授業に対する質問をしたりする場となった。

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 様々な活動を実施することだけによらない、管理職や責任者等による確実な見届けや、成果や効果等を全職員で共有するための工夫が必要である。
- ◇ 取組を確実に見届け、その状況を全職員で共通理解できるシステムを構築する。